

令和 4 年 6 月 22 日現在

機関番号：17401

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2021

課題番号：17K02703

研究課題名(和文)複合述語構文の、話者間・同系言語間・異類型言語間における変異

研究課題名(英文)Cross-speaker, dialectal and typological variation in complex predicate constructions

研究代表者

山部 順治(YAMABE, Junji)

熊本大学・大学院人文社会科学研究部(文)・准教授

研究者番号：00330598

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,900,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は複文の文法についてである。複文諸構文の多様性を記述・説明した。記述的な側面においては、それら構文において生じる特徴的な事象を発掘し、理論面においては、それら事象を手掛かりとしてそれら構文の構造や文法規則を解明した。一つの言語における諸構文間の異同や、別々の言語にある対応する構文どうしの異同を明らかにした。調査対象言語は、主がオリヤ語(インド東部、印欧語)、次に日本語(標準語と中国・九州地方の若年層の方言)である。オリヤ語については、インド・オリッサ州においてオリヤ語話者を対象とする調査を期間内に繰り返して実施した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、オリヤ語(インド東部、印欧語)と日本語の標準語・方言の文法について調査・整理した。本研究は、これら言語に独特の事象を発掘したほか、その資料に基づき、言語学において基本的であり近年新知見もたらされるつつあるいくつかの論点について、新事実・新見解を寄与した。

本研究の貢献は、言語学の諸問題の解明に対してだけでなく、オリヤ語の学習に必要な言語情報の整備や、日本の方言の現時点の状況の記録のために、有用である。

研究成果の概要(英文)： This research is an investigation into the grammar of complex sentences. It described and explained the variation of complex sentences. On the descriptive side, it uncovered characteristic phenomena occurring in those sentences. On the theoretical side, it clarified the structure of those sentences and the grammatical rules applying in them. It also revealed the similarities and differences between kinds of (complex-sentence and other) constructions in a single language, as well as between the comparable constructions in separate languages. It dealt with the Odia language (Eastern India, Indo-European), and with Japanese, Standard and Chugoku-Kyushu youth dialect. For data collection, a series of fieldwork was conducted in Odisha, India, with native speakers.

研究分野：言語学

キーワード：文法 インドの言語 オリヤ語 九州方言 方言差 格体制 異化 人称制限

## 様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

本研究は、複文の文法である。複文の諸タイプのうち、中心に取り上げるのは、従属節が動詞の補文であって、補文の縮約度が比較的高く主語位置を欠くと見なされるものである。これに該当する複文の種類は、(a)restructuring 構文と、(b)形態的使役構文(使役接辞が補文を取っていると見なされる)である。このほかの複文として、補文が音型のない主語(いわゆる PRO 代名詞)を含んでいると見なされるもの、および、条件文を取り上げる。

上述の(a)(b)類の構文は、多くの言語に見られ、文法構造に関して次のような主要研究がある。(a)については、ヒンディー語(M. Butt 1995, Butt and Ramchand 2005, R. Bhatt 2005)、日本語(統語的複合語や補助動詞の研究、特に Miyagawa 1987, 影山 1993)、イタリア語(Rizzi 1982)、スペイン語(Aissen and Perlmutter 1983)、ドイツ語(Wurmbbrand 2001)、(b)については、ヒンディー語(A. Saksena 1982, Ramchand 2008, Richa 2013)、日本語(「～させる」)。

研究代表者(山部)には次のような準備があった。1991年からインドにおいて現地の諸言語を調査していた。そのうち、オリヤ語(Odia, Oriya, インド東部、印欧語)については、文法的諸側面を調査していた。その複合述語構文についても概略的に記述・暫定的に説明しており、特異性を数点指摘していた。一方、日本語に関しては、補助動詞の用法を主に取り上げ、2000年から勤務校の内外で、多人数対象のアンケート調査を継続し、諸現象を発掘するほか、話者間変異を捉えるアンケート調査の手法を整備していた。

### 2. 研究の目的

本研究は、複文の諸構文—とくに上述の(a)(b)のタイプの複合述語構文—の多様性を記述・説明するものである。記述的な側面においては、それら構文において見られる特徴的な事象を発掘し、理論的においては、それら事象の観察を手掛かりとして構文の構造や文法規則の性質を解明する。一言語体系における諸構文間の異同と、異言語体系における対応する構文どうしの相違を明らかにする。

調査対象言語は、主がオリヤ語(インド東部、印欧語)次に日本語(標準語と中国・九州地方の若年層の方言)である。また、オリヤ語と対比すべく、断片的にインドの印欧諸語(ヒンディー語、ベンガル語など)も扱う。これらの言語をめぐって、体系間の相違を3つの尺度で描く。(a)話者間(特にオリヤ語内部における)、(b)系統的に近い言語間(インドの印欧諸語や、日本語の諸方言)、(c)系統的に異なる言語間(インドの言語と日本語)。

本研究はいくつかの方向からの寄与を目論む。複文—とくに複合述語構文—が関係する研究動向に対しては、次の3点である。(a)多様性と体系間の相違について、独特な事象を発掘し、諸事実を整理する枠組みを提示する。(b)理論研究における争点に対して、有用な事実と新しい視点を提出する。(c)諸言語の記述的研究に対して、類似の現象を発掘する契機を提起する。より一般的な関心に対しては、次の3点での寄与を目指す。(d)資料収集(面接調査、アンケート調査)の技法を改良する。(f)日本語の方言の変遷の記録として、文法の一領域の一時点におけるスナップショットを残す。(e)外国語としてのオリヤ語学習にとって、有用な語学的情報を収集・整理する。

### 3. 研究の方法

複文の統語的性質に関して、事実を発掘・整理しそれに理論的説明を与えた。研究対象言語はオリヤ語で、その他、補助的に日本語を扱った。(1)インドと(2)国内の勤務校における作業は次のとおりである。

(1) インド・オリッサ州の2地点(次の(a)(b))において、オリヤ語に関する資料を収集した。主に、話者との面接によるもので、作例についての適格性判断を採集した。このほか断片的に、自発的談話も採集した。

a. カタック市においては、次のいずれも1か月弱の期間、調査を実施した。

2017年5~6月、2017年9月、2018年3~4月、

2018年5~6月、2018年12月~2019年1月、2019年12~2020年1月

これらの調査では、毎日4時間ずつ、オリヤ語話者1名の協力者を対象に面接調査を行った。この協力者とは1996年から協働を継続してきた。詳細にわたる項目を取り上げ、本研究開始以前から蓄積してきた資料を拡張・精緻化した。

b. ウトカル大学(ブバネスワル市)では、下記のいずれも1か月の弱の期間、調査を実施した。

2019年3月、2019年9月

同大学における調査では、3名の話者(両調査で異なる人)と毎日合わせて4~6時間の面接を持った。協力者は職員1名を除き全員大学院生だった。このほか、話者約50名対象のアンケート調査を行った。これらの調査では、数点の文法項目に関して、複数人数の話者の間で、十分な一般性を確認するとともに、数点の変異の存在を明らかにした。

オリッサ州での調査は、上記の他 2020 年 3 月に予定していたが、コロナ禍の勃発のため中止した。研究期間を 2 年間延長し実施の機会をうかがったが、その期間内には実施できなかった。

(2) 勤務校(2017~2019 年度は岡山市、2020 年度は熊本市)においては、オリア語資料の整理・考察、次回調査の質問整備、日本語の関連事象についての資料収集、理論的考察を行った。日本語標準語や回答者の方言における条件文や複合動詞の用法について、約 100 名対象のアンケートを繰り返し実施し、話者間変異に関する資料を得た。このほか、混成語のアクセントについても、調査を実施した。

この他の言語については、本研究期間以前の調査で得た資料(ヒンディー語、ベンガル語)や、先行研究による事実報告・理論的知見を考察の基礎とした。

#### 4. 研究成果

発表論文・学会発表・講演は下記表のとおりである。著者・発表者・講演者はいずれも研究代表者(山部)単独。これらについて 4 つの領域(1)-(4)に分けて述べる。

##### (1) オリア語の複合述語と関連規則の文法

発表論文 2,3,4,5,7,8,9,10、学会発表 1,2、講演 1,2,4

代表者(山部)によって調査期間以前に、オリア語に独特な事象として次のことが分かっていた。複合述語構文においては、(a)同一格の文中共起を禁止する制約(同一格制約、ないし異化的制約)および(b)文中の 2 名詞句について、統語的位置関係と名詞句階層上の序列を制限する制約(名詞句階層に関する制約)が適用される。(b)は、研究文献で「人称・格制約」と呼ばれる事象を包括するものである。また、両制約(a)(b)は、複文の領域外では、ある種の基本的でない単文(受動文や経験者主語文)においても、適用される。これに対し、両制約(a)(b)は、基本的な単文(能動文など)や、縮約度の低い(例えば PRO 主語を含む)補文を持つ複文においては、まったく働かないか、別な仕方働く。さらに、両制約の適用される強度は構文によって差があり、概略、基本的な構文からの逸脱の度合いが大きいほど(構文が主語特徴の多くを失っているほど)、両制約は強い影響をもって適用される。

本研究期間においては、両制約に関わるオリア語独特の事象を詳細に記録し、それを資料として複合述語構文各種の構造と、両制約の性格を明らかにした。また、発表論文 2、学会発表 1 では、制約(b)の適用され方に関して話者間の相違を報告しその理由は、話者間で二重他動詞の構造が異なるからだと説明した。

##### (2) オリア語の文法に関する、それ以外の論題

学会発表 2,4

学会発表 2 は、オリア語において、経験者主語構文が両義的であることを示した。文中の 2 項(経験者と対象)がいずれも主語となりうる。学会発表 4 は、非人称構文には、2 種類あり、それらは音型無しの主語が有るか・主語位置が無いが、によって区別されることを示した。

##### (3) 日本語の補助動詞と条件節の文法

発表論文 4、学会発表 3

九州・中四国地方の若年層方言における補助動詞「おく」「おる」について、代表者(山部)の従前の研究によって、次のように使い分けられることが分かっていた:事態が望ましいと提示されているか(その場合「おく」)そうでないか(その場合「おる」)(これに対し、標準語での使い分けは、事態が意志的と提示されているか(「おく」)そうでないか(「いる」))

本研究では、両補助動詞の使い分けが、否定極性表現の可否や数量詞の作用域とどのように相互交渉するか、観察した。それに基づき、否定条件節「~んと」「~ないと」の構造が両義的であることを示した。研究文献で主張ないし想定されているように、意味的に否定が望ましさ(あるいは、望ましくなさ)を加えて帯びるのではなく、否定と望ましさ交替する。また、否定か望ましさかという区別は、日本語の他の否定条件形の分類に有用であることを示した。

##### (4) 日本語の混成語のアクセント

発表論文 1、講演 3,5

日本語混成語のアクセントに関して、言語学の入門授業において 2013-2020 年に実施したアンケート調査の蓄積をもとに、新規の混成語に適用されるアクセント規則とその話者間変異を報告した。

#### 発表論文

1. 混成語のアクセントに関する話者間変異  
『ありあけ』21, 45-62, 2022 年 3 月
2. The Person-Case Constraint in Two Dialects of Odia  
『人文科学論叢』3, 7-29, 2022 年 3 月

3. オリヤ語における、同一格制約の効力が { ない | ある | 強くある } 構文  
『日本言語学会第 160 回大会予稿集』 115-121, 2021 年 11 月
4. 動詞の否定条件形の構造的両義性—九州・中四国方言の補助動詞「おく」の非意志的用法から分かること—  
『ありあけ』 20, 39-72, 2021 年 3 月
5. オリヤ語のコピュラ節に見られる、名詞句階層に関する制約  
『日本言語学会第 161 回大会予稿集』 29-35, 2020 年 11 月
6. オリヤ語における、類別詞付き名詞句に関わる格制約  
『日本言語学会第 160 回大会予稿集』 188-194, 2020 年 6 月
7. The person constraint in Odia  
*Queries in the structure of language*, ed. by Tariq Khan. 1-13, 2020 年 7 月  
Mysuru: Central Institute of Indian Language,
8. オリヤ語における、2 つの人称・格制約  
『日本言語学会第 157 回大会予稿集』 318-323, 2018 年 11 月
9. オリヤ語で、人称制約が見られる構文環境と、そうでない構文環境  
『日本言語学会第 156 回大会予稿集』 277-282, 2018 年 6 月
10. オリヤ語における、同一格の連続を許す構文環境と、許さない構文環境  
『日本言語学会第 154 回大会予稿集』 164-169, 2017 年 6 月

#### 学会発表

1. A cross-speaker variation concerning the Person-Case Constraint in Odia  
The 41st International Conference of Linguistic Society of India (ICOLSI-41) 2019 年 11 月 13 日
2. オリヤ語の斜格経験者構文における隠れた主語交替  
『日本南アジア学会第 32 回全国大会報告要旨集』 2019 年 10 月 6 日
3. 九州・中四国方言の補助動詞「おく」の非意志的用法の分布から、条件文の構造に関して分かること  
第 274 回筑紫日本語研究会・第 46 回九州方言研究会、筑紫女学園大学 2019 年 7 月 6 日
4. オリヤ語における 2 つの非人称構文  
『日本南アジア学会第 30 回全国大会報告要旨集』 51-51 2017 年 9 月

#### 講演

1. The double objective-case constraint in Odia  
Department of Linguistics, Delhi University, 2019 年 3 月 29 日
2. The double objective-case constraint in Odia  
Department of Odia, Utkal University, 2019 年 3 月 19 日
3. Where do you put accent in new Japanese words?  
Department of Linguistics, Berhampur University, 2018 年 12 月 26 日
4. The person constraint in Odia  
Department of Linguistics and Phonetics, English and Foreign Languages University, Hyderabad, 2018 年 4 月 4 日
5. Where do you put accent in new Japanese words?  
Seminar at the Department of Anthropology, Utkal University, 2017 年 9 月 6 日

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計10件（うち査読付論文 3件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 6件）

1. 著者名 山部 順治	4. 巻 20
2. 論文標題 動詞の否定条件形の構造的両義性 九州・中四国方言の補助動詞「おく」の非意志的用法から分かること	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 ありあけ	6. 最初と最後の頁 39-72
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 山部 順治	4. 巻 -
2. 論文標題 オリヤ語における、類別詞付き名詞句に関わる格制約	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 日本言語学会第160回大会予稿集	6. 最初と最後の頁 188-194
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 山部 順治	4. 巻 -
2. 論文標題 オリヤ語のコピュラ節に見られる、名詞句階層に関する制約	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 日本言語学会第161回大会予稿集	6. 最初と最後の頁 29-35
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 Yamabe, Junji	4. 巻 -
2. 論文標題 The person constraint in Odia	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Tariq Khan, ed., Queries in the structure of language, Mysuru, India: Central Institute of Indian Languages	6. 最初と最後の頁 1-13
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Junji Yamabe	4. 巻 -
2. 論文標題 A cross-speaker variation concerning the Person-Case Constraint in Odia	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Selected papers from the 41st International Conference of Linguistic Society of India (ICOLSI-41)	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 山部 順治	4. 巻 -
2. 論文標題 オリヤ語における、類別詞付き名詞句に関わる格制約	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 日本語学会第160回大会予稿集	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 山部順治	4. 巻 na
2. 論文標題 オリヤ語で、人称制約が見られる構文環境と、そうでない構文環境	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 日本語学会第156回大会予稿集	6. 最初と最後の頁 277-282
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 山部順治	4. 巻 na
2. 論文標題 オリヤ語における、2つの人称・格制約	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 日本語学会第157回大会予稿集	6. 最初と最後の頁 318-323
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Junji YAMABE	4. 巻 na
2. 論文標題 The person constraint in Odia	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 4Selected papers from the 40th International Conference of Linguistic Society of India (ICOLSI-40)	6. 最初と最後の頁 印刷中
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 山部順治	4. 巻 na
2. 論文標題 オリヤ語における、同一格の連続を許す構文環境と、許さない構文環境	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 日本言語学会第154回大会予稿集	6. 最初と最後の頁 164-169
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

[学会発表] 計5件(うち招待講演 2件/うち国際学会 1件)

1. 発表者名 山部 順治
2. 発表標題 九州・中四国方言の補助動詞「おく」の非意志的用法の分布から、条件文の構造に関して分かること
3. 学会等名 第 274 回筑紫日本語研究会・第46回九州方言研究会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 山部 順治
2. 発表標題 オリヤ語の斜格経験者構文における隠れた主語交替
3. 学会等名 日本南アジア学会第32回全国大会(国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Junji YAMABE
2. 発表標題 The person constraint in Odia
3. 学会等名 Graduate seminar, Department of Linguistics and Phonetics, English and Foreign Languages University, Hyderabad (招待講演)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Junji YAMABE
2. 発表標題 The double objective-case constraint in Odia
3. 学会等名 Graduate seminar, Department of Linguistics, University of Delhi (招待講演)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 山部順治
2. 発表標題 オリヤ語における2つの非人称構文
3. 学会等名 日本南アジア学会第30回全国大会報告要旨集、p.51
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件



8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------